小学校児童を対象とした集団 SST の効果の検討

○吉田和樹・浜崎隆司
(鳴門教育大学大学院学校教育研究科)
キーワード: 社会的スキル訓練, ソーシャル・サポート, 学校適応感

Effects of Social Skills Training in the Classroom for elementary school children.
Kazuki YOSHIDA, Takashi HAMAZAKI
(Graduate School of Education, Naruto University of Education)
Key words: social skills training, social support, school adjustment

■目的■ 本研究では、小学校児童を対象とした集団 SST を実施し、集団 SST が児童の社会的スキル、ソーシャル・サポート、学校適応感に及ぼす効果を検討する。

■方法■ 研究協力者 小学 5 年生 62 名。実施時期 質問紙調査、集団 SST 実施を含め、2009 年 10 月～2010 年 3 月。

標的スキルおよび適応指標の選択 担任教師に対する自由記述式アンケートおよび石川ら(2007)の研究を基に、標的スキルは「仲間強化スキル」と「先生との関係スキル」を選択した。これらの社会的スキルは小・中学校教師を対象とした調査でも重要視されている社会的スキルである(藤枝・新井, 2008)。適応指標は、ソーシャル・サポートと学校適応感を選択した。

使用尺度 児童を対象として介入前(10 月上旬)、介入後(11 月下旬)、介入終了 4 か月後(3 月下旬)に以下の質問紙を実施した。質問紙調査は朝の会や帰りの会などの時間を利用して、担任教師の指示により一斉に実施してもらうよう依頼した。

(1) 社会的スキルの自己評定 : 児童用社会的スキル尺度(江村ら, 2002)を用いた。本尺度は 29 項目の社会的スキルから構成されており、「仲間強化」「規律性」「社会的働きかけ」「先生との関係」「主張性」「葛藤解決」の 6 因子からなる。「いつもそうする:4」～「ぜんぜんそうしない:1」の 4 件法。

(2) 学校適応感の評定 : 主観的学校不適応感尺度(戸ヶ崎ら, 1997)の各質問項目を児童らがもつ仲間や教師へのイメージに対する影響に考慮し、ネガティブなイメージを抱きそうな質問項目を修正後、学校適応感尺度として用いた。本尺度は「友だちとの関係」「先生との関係」「学業場面」という 3 因子、15 項目から構成されている。「いつもあてはまる:4」～「ぜんぜんあてはまらない:1」の 4 件法。

(3) 知覚されたソーシャル・サポートの評定 : 小学生用ソーシャル・サポート尺度短縮版(嶋田・岡安・坂野, 1993)を用いた。各質問項目について、担任教師、担任以外の教師、友だちの 3 つのサポート源におけるソーシャル・サポートの期待について回答を求めた。「きつとそうだと思う:4」～「ちがうと思う:1」の 4 件法。

社会的スキル訓練 集団 SST 実施期間は約 1 か月半で、セッション数は 2 週間に 1 セッションずつ、計 3 セッションが実施された。前半の 2 セッションで「仲間関係スキル」、後半の 1 セッションで「先生との関係スキル」を取り上げた。集団 SST は 3 名のトレーナー(大学院生)によって実施された。

■結果と考察■ 集団 SST の効果を検討するために、Time 1～Time 3 までの各尺度平均得点を用いて、測定時期(Time 1・Time 2・Time 3)を要因とする分散分析を行った(各因子得点の α 係数とともに、Table 1 に示す)。以下、標的スキル(仲間強化・先生との関係)、ソーシャル・サポート(友人・担任・担任以外)、友人・教師との関係に関する適応感の結果を記述する。

まず、標的スキルである仲間強化スキル得点について分散分析を行った結果、時期の主効果が有意($F(2, 56) = 9.01, p<.01$)だった。多重比較の結果、T1 と T2、T1 と T3 の間で得点が増加していた($p<.01$)。T2 と T3 の間では、得点の有意な変化はみられなかった。また、先生との関係スキルについても同様の分析を行った結果、時期の主効果が有意傾向($F(2, 56) = 2.44, p<.10$)を示した。多重比較の結果、T2 と T3 の間で得点の増加がみられた($p<.05$)。

ソーシャル・サポートの各因子得点についても測定時期を要因とする分散分析を行った。友人サポート得点について分散分析を行った結果、時期の主効果が有意傾向($F(2, 56) = 2.69, p<.10$)を示した。多重比較の結果、T1 と T3 の間で得点の増加がみられた($p<.05$)。担任教師・担任以外の教師からのサポート得点については有意な結果がえられなかった。

学校適応感尺度の各因子得点についても測定時期を要因とする分散分析を行った。友人関係適応得点について分散分析を行った結果、時期の主効果が有意傾向($F(2, 56) = 2.68, p<.10$)を示した。多重比較の結果、T2 と T3 の間で得点が増加していた($p<.05$)。教師との関係については有意な結果がえられなかった。

以上の結果から、本研究で実施した集団 SST は児童の仲間関係スキルおよび友人関係に関する適応指標にポジティブな影響を与えたことが示された。しかし、教師との関係に関するソーシャル・サポートや適応感に関してはポジティブな結果がえられず、さらなる検討が必要であると考えられる。

■引用文献■ ●江村ら(2002) 日本カウンセリング学会第 35 回大会発表論文集, 94. ●藤枝ら(2008) 発達臨床心理学研究, 19, 21-33. ●石川ら(2007) カウンセリング研究, 40, 38-50. ●嶋田ら(1993) ストレス科学研究, 8, 1-12. ●戸ヶ崎ら(1997) ヒューマンサイエンスリサーチ, 6, 207-220.

Table 1 集団SSTの効果()内は標準偏差

		Time 1(介入前)	Time 2(介入後)	Time 3(介入終了4か月後)	F値	
社会的スキル	仲間強化スキル($\alpha=.84$)	3.19 (0.43)	3.34 (0.44)	3.41 (0.34)	9.01 **	T1<T2, T1<T3
	先生との関係スキル($\alpha=.77$)	2.71 (0.63)	2.61 (0.61)	2.83 (0.57)	2.44 †	T2<T3
	葛藤解決スキル($\alpha=.50$)	2.81 (0.51)	2.82 (0.60)	2.95 (0.41)	1.54 <i>n.s.</i>	
	規律性スキル($\alpha=.75$)	3.35 (0.46)	3.26 (0.44)	3.40 (0.41)	2.86 †	T2<T3
	主張性スキル($\alpha=.38$)	2.87 (0.51)	2.87 (0.66)	3.06 (0.53)	3.29 *	T1<T3, T2<T3
	社会的働きかけスキル($\alpha=.73$)	3.22 (0.69)	3.38 (0.46)	3.40 (0.57)	1.5 <i>n.s.</i>	
ソーシャル・サポート	友人サポート($\alpha=.76$)	3.37 (0.47)	3.47 (0.50)	3.55 (0.45)	2.69 †	T1<T3
	担任サポート($\alpha=.92$)	3.17 (0.68)	3.15 (0.72)	3.12 (0.71)	0.07 <i>n.s.</i>	
	担任以外サポート($\alpha=.84$)	2.60 (0.63)	2.70 (0.73)	2.78 (0.61)	1.77 <i>n.s.</i>	
学校適応感	学業($\alpha=.68$)	2.83 (0.56)	1.82 (0.30)	2.86 (0.47)	123.74 **	T1>T2, T2<T3
	友人との関係($\alpha=.71$)	3.07 (0.53)	2.94 (0.65)	3.17 (0.60)	2.69 †	T2<T3
	教師との関係($\alpha=.80$)	3.24 (0.59)	3.10 (0.62)	3.12 (0.60)	1.33 <i>n.s.</i>	

Note : † $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$